



研修で学んだことを帰国後にどう生かすか、アクションプランを練る研修員たち

# PLAYERS

国際協力の担い手たち

## 公益財団法人日本障害者リハビリテーション協会

### 研修を通して 自分を、周りを、社会を変える

障害者の社会参加の促進やリハビリテーションの振興に取り組む公益財団法人日本障害者リハビリテーション協会。JICAの障害者分野の研修にも長年協力しており、多くの元研修員が世界各地で活躍している。



「こんな重度の障害があっても自立して生活できるんですね」と、脊髄性筋萎縮症の障害がある講師の海老原宏美さん(右)に感銘を受けるナイジェリアからの視覚障害者

#### 2つの研修を通じて 25年以上、人材育成に貢献

「自分の国では、できることしかない、行けるところにしか行かないという人が多かったと思います。でも、せっかく日本に来たのですから、自分がやりたいことをやって、行きたいところに行ってみましょう！」

今年10月、JICA東京のセミナー室。講師の公益財団法人日本障害者リハビリテーション協会の奥平真砂子さんが笑顔で話す。彼女の言葉に耳を傾けているのは、アジア、アフリカ、中南米など6カ国から来日した7人の障害者。8週間にわたるJICAの研修「障害者リーダーシップ育成とネット



地下鉄の乗り降りを体験する研修員。迅速かつ安全に補助を行う駅員の対応に驚いていた



JICAのフォローアップ事業で、カザフスタンの帰国研修員カシェットさん(右端)が若い障害者を対象に研修を実施した



研修の講師を務める奥平さん(中央)、沖田さん、海老原さんは障害当事者。日本で重度の障害者がどう生活しているか、自身の経験を交えて研修員に伝えている

ワーキング」コースの開講式での一幕だ。実は奥平さん自身も脳性まひによる障害のある当事者。民間企業による障害者リーダーの育成事業に参加したことをきっかけに、30年近く障害者支援に携わっている。

日本障害者リハビリテーション協会は1964年に設立され、障害者の社会参加促進のための啓発イベントやリハビリテーションに関する調査研究、情報発信などを行っている。さらに、81年の「国際障害者年」を契機に国際協力にも力を入れ始め、省庁や民間企業と共同で開発途上国から研修員を受け入れたり、国際的に活動する障害者団体とのネットワークづくりなどを行ってきた。JICAとも協働で25年以上にわたり障害者分野の研修を企画、実施している。

その一つが、冒頭の「障害者リーダーシップ育成とネットワーク」コース。障害者団体、NGO、政府機関などで3年以上働いた経験を持つ障害当事者を、自分の国で、障害者リーダーとして活躍できる人材に育成することが目的。また、リハビリテーションセンターやNGO、政府機関で障害者の就労をサポートするスタッフを対象にした「障害者の雇用促進とデイリーストワークの実現」コースでは、障害者が自立し働きたいのある仕事に就けるよう、日本の障害者雇用政策を学んだり障害者の就労現場を視察し、途上国の障害者の雇用促進に貢献する人材育成に取り組んでいる。



知的障害者が働いている農場を訪れた研修員。「途上国では知的障害者は何もできないと思われていることが多いが、障害があってもしっかり働けるのだと実感した」との声も

#### リーダーシップ研修の 成果を自国で生かす

「自分がこんなに変わることができるとは思ってもみなかった」。ジンバブエの障害者団体から「障害者リーダーシップ育成とネットワーク」コースに参加した研修員の言葉だ。途上国では、多くの障害者は社会から抑圧され、時には家族から虐待を受けることもある。「彼は小人症(低身長症)のため、周りからバカにされないよう

にずっと自分を強く見せながら生きてきたのでしよう。最初はいつもみけんにしわを寄せ、険しい顔をしていました」と奥平さんは話す。

しかし、研修の一環で障害者が障害者の思いを聞くピアカウンセリングを受けたり虐待防止ワークショップに参加したこと、彼は自分の障害と向き合い、人生で初めて自分の障害について周囲に話せるようになった。「自分について話すことが心の扉を開く第一歩。研修を通じてみんな表情がだんだん変わり、目が輝いてくるのが分かります」と奥平さん。まずは自分の障害を受け入れる。そして周りに自分の意志を発信し、自らの力で周囲を変えていく。自分を変えることが周囲を、そしていずれば社会を変えることにつながるっていくのだ。

研修では、日本の公共交通機関のバリアフリーについて学ぶため、電車やバスの乗降も体験。「障害があっても、自分の中で限界を決めてしまわず、どんどん外に出てほしい。適切なサポートがあれば大抵のことはできると知ってほしいのです」。研修の最後には、自国での障害者支援の改善のためにどのような活動を行うべ

きか、アクションプランを作成する。

そして帰国後、このアクションプランや研修での学びを生かして、多くの人が活躍している。国際NGO「リハビリテーション・インターナショナル」の事務局長を務めるビーナス・イラガンさんや、国際障害当事者団体「障害者インターナショナル」の世界会議議長ジャビッド・アビディさんもリーダーシップ研修の元研修員だ。また、パキスタンの身体障害者団体代表のムハマド・アティフさんは、複数の国際NGOと連携し、パキスタン国内で国際会議の開催を実現。「災害時の障害者への緊急対応」をテーマに取り上げ、障害当事者や関係者が意見交換できる場をつくっている。また、カザフスタンの視覚障害者カシェット・オマロヴァさんはNGOを設立し、若い障害者のエンパワメントのために研修を行ったり、家に閉じこもっていることが多くい障害者を地域の協力を得て映画館に連れていくキャンペーンを実施するなどの活動を展開している。

「私自身、かつては、障害者は何もできない」と思っていました。でも、30年前にアメリカの自立生活センターで現地の障害者に出会い、障害があっても自分の意志で生活することが可能なのだとなりました。その経験を研修員たちに伝えたい」という奥平さん。日本障害者リハビリテーション協会は、途上国の障害者の社会参加促進のため、これからも人材育成に貢献していく。